

多様な個性を伸ばすスポーツ指導

企画者：大会準備委員会

司会者・通訳：佐柳信男（山梨英和大学）

話題提供者：Keith Duquette (EMC Corporation)

為末 大（一般社団法人 アスリートソサエティ）

指定討論者：尾見康博（山梨大学）

通訳：Colin Moreshead (The New York Times)

1. 企画主旨

2012年12月に高校バスケットボール部の主将が自殺した事件は、日本のスポーツ指導者の指導のあり方について議論を巻き起こした。その中心の一つとなったのが体罰の是非であった。驚かされるのは、世代を問わず、体罰を肯定する意見がその後も依然としてあり、かつ、あの痛ましい事件後ですら、スポーツ現場における体罰の実態がプロアマ問わずマスコミやネットメディアで報じられ続けていることである。表沙汰にならないものの方がおそらく多いであろうし、実際に体罰を用いて指導しているという話は聞くので、日本中で体罰を用いた指導がなされているものと思われる。また、体罰とは言えなくても、脅したりすかしたり、人格を否定するような暴言はさらに「常識的」に用いられており、現場で問題視されているとは思えない。

強くなるため、あるいは上手になるためには、体罰をはじめとする罰による指導が不可欠であるという信念は指導者の間に根強くあると思われるが、それはなぜなのだろうか。欧米だったら人権問題になりそうな指導がなぜ未だに継続しているのだろうか。

また、日本独特のスポーツ文化である部活は、地域クラブが普及していない日本においては、スポーツ界の底辺を支えている活動である（詳しくは、中澤(2014)やOmi(in press)を参照）。しかし、学校の課外活動であるにもかかわらず、体罰や暴言による指導がここまで容認されている。それだけでなく、当該スポーツの専門家でない教員が顧問をすることも多く、顧問が当該スポーツのプレーヤーとしての経歴を持っていたとしても、指導やコーチングの研修が充実していないために、必ずしも指導者として適切であるかどうかをわ

からない。

また、特に集団競技の場合、生徒の上手い下手（技量の差）による扱われ方の違いが半端なく大きい。レギュラー組とベンチ組、プレーヤー組と応援組との間でまったく異なる。部活動は、教育の一環とみなされるにもかかわらず、なぜ、このような不平等が容認され続けているのだろうか。日本の教育は悪平等と揶揄されるほどに平等が好まれているにもかかわらず。

体罰や暴言による指導、そして不平等な指導は、「多様な個性を伸ばす指導」とはおおよそ相容れないものと思われる。また、生涯スポーツという観点からも、スポーツ嫌いを一定程度育てているという意味でマイナスに働いているものと思われる。

本シンポジウムでは、米国のスポーツ指導の実態を地域のクラブチームで女子バスケットボールのコーチをしている Keith Duquette 氏に紹介していただくとともに、400Mハードルの世界選手権二大会連続銅メダリストであり、現在の日本のスポーツ指導やスポーツのあり方についてマスコミやSNS等で積極的に発言している為末氏にご見解を披瀝していただくことにより、グローバルな観点に立ち、日本における「多様な個性を伸ばすスポーツ指導」がいかに可能であるかを考えたい。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 米国のアマチュアスポーツのコーチの立場から

Keith Duquette (EMC Corporation)

I will introduce my style of coaching teenage girls' basketball in the USA. I am looking forward to discussing cultural comparisons of coaching youth athletes in the USA and Japan.

2.2. アスリートの立場から

為末 大（一般社団法人 アスリートソサエティ）とある空手の指導者が、日米両方で指導をされた経験からお話しされていたことがある。日本では礼をしなさいと教えるとそれを素直に子供達がやる。もしやらなかった子がいたとしてもこれは大事なことからとにかくやりなさいという一言で教えていくそうである。

一方でアメリカに渡った時、クラスの最初に礼をしなさいというと、なんの為にですか？と質問が来て面食らったようだ。それで自分でもよく考えてみるとうまい説明をすることができない。最終的に“感謝をするということをして礼という動きで表しなさい”と説明したそうである。

『礼をしなさい。そうすれば感謝の心が芽生えるから』と教える日本と、『感謝の心を持ちなさい。そうすると自然と頭が下がるから』と教える米国。身体で覚えて内面を変化させる文化と、頭で理解しそれを身体で表現する文化の違いとも言えるかもしれない。

スポーツ指導ではとにかくやっていけばいずれ身体が覚えてその後に意味がわかるということがよくある。そういう経験値が溜まってある種のシステムになったものが型である。型は誰しもをそれなりのレベルに引き上げてくれるという便利なものだが、一方で型にはめ込んでしまい個人の個性を殺してしまいかねないこと、さらには何でも身体で覚え込ませて自分の頭で考えることができないアスリートを育ててしまいかねない。

一方で、まず理解させてから身体で覚えていく文化では、一人一人の選手が自分の頭で考えて行動するような方向に促される。さらに選手一人一人の個性を殺さないで伸ばしていくこともできる。一方で、あまり勘のよくない選手は理解ができないので、型を覚えて引き上げてもらうということができず、ばらつきが生まれる。

指導をしていく中でたくさんの疑問が生まれ、葛藤もうまれる。

正しい方向に人を育てるということには、育てられる相手は正しいことを知らず、自分は知っているという傲慢さがありはしないだろうか。自分の考えを押し付けてはならないと言って、相手を相手のままおいておくというのは教育の放棄にはならないだろうか。自分らしく生きなさいという言葉は、自分らしさを見つけなければならぬという圧力を相手にかけていないだろうか。個性という時に、生来の性質と、教育によって出来上がったものを見分けはつくのだろうか。そして後者はある種の価値観の押しつけの産物とはいえないだろうか。

指導というものはある完成した何かを知っている側が一方的に教えられる側に伝えていくものではなく、双方が刺激をしあい、成長し合っていくものではないかと感じている。そしてその時に指導者が持つべき大きな問いは“一体どんな人間を育てたいのか”というものではないかと思っている。

スポーツを通じて人間をどう育てていくのか。そういう問いを少しでも深めていけるような機会になればと思う。

引用文献

中澤篤史 2014 運動部活動の戦後と現在：なぜスポーツは学校教育に結びつけられるのか 青弓社

Omi, Y. (in press) The potential of the globalization of education in Japan: The Japanese style of school sports activities (*bukatsu*). In M.V.Dazzani, M..Ristum, G.Marsico,& A.C.Bastos (Eds.) Looking inside and outside the educational contexts through cultural lens.